

クラウス・マンの亡命者の物語：『火山』について ——庇護なき世界における自己堅持——

林 敬*

Über Klaus Manns «Der Vulkan. Roman unter Emigranten»
——Die Selbstbewahrung zur Opposition in der Welt ohne Schutz——

Kei Hayashi

Received November 1, 1990

はじめに

クラウス・マンの『火山』は、その副題も示すとおり文字どおり亡命者の物語である。改めて言うまでもなく、ナチスによる迫害の難を逃れて国外に脱出した人たちによって書かれた作品群の一つである¹⁾。作者自身亡命者であり、この作品は亡命者たちの貴重な記録と評価されている²⁾。一般に亡命作家たちは否応なく政治を強制されざるをえなかった。従って、亡命文学は作家のそれぞれの立場にかかわらず一定の政治的、社会的意味を帯ざるをえなかった。そのことから、文学的立場のみならず、現実の政治的、党派の立場からも、作品に対するさまざまな解釈、評価がなされた。現代において作品を読む場合も当然これらの事情を看過することはできない。言い換えると、亡命文学を理解する場合、文学史的視点のみならず、政治的、社会的視点、とりわけこの時代にあつては、作家個人の事情に対する視点、時代と作家の交錯に対する視点が十分考慮されねばならない。

『火山』の場合も主としてこのような視点から論考されている³⁾。もともとクラウス・マンの場合はロマンもエッセイも自伝的作品であつた。彼の関心は現実に切実な事柄を書くことであつた。その意味で自伝的なものと社会的なものが結びついていた⁴⁾。そして、彼の生きた時代は激動の時代である。彼はその激動の中で、時代に立ち向かつた。また、ドイツを代表する作家の息子として、早くから文学的世界の影響の下に育つた。従って、彼の作品においては上記の要素が切り離しがたく結合している。

『火山』が出版されたのは1939年の夏であつたが、クラウス・マンの回顧によると、その後数週間して始まった戦争のために彼の声は消し飛んでしまったということである⁵⁾。とはいえ、当時の亡命雑誌にすでにいくつかの批評が載つた。そのうちの一つは、この作品のロマンとしての完成度を問題にして「事実報告」と評している⁶⁾。しかし、作品の中で描写されている各

*教 養 部

Faculty of General Education

エピソードは、それぞれに関連しあったテーマをもっており、全体として一つのテーマ構造をもっている⁷⁾。本稿では、この作品の小説としてのテーマ構造の認識の下に、文学史的、亡命史的視点、自伝的視点から、作品の示している一つの自己認識を中心に考察するものとする。(後年の評価ではこの作品の通俗小説的側面の指摘がみられるが、ある作品が通俗的であるかどうかという問題は複雑な問題である。しかし、本稿ではこのテーマには触れない。)

- 1) 「亡命文学」という概念については、M.Wegner: *Exil und Literatur*. (S.18-19) など多数言及されている。要するに、亡命はナチスの時代だけではないし、その時代に限定しても、厳密な定義は簡単ではない。亡命した作家たちは1933年以前から作品を書いており、それらも禁書の対象になっている場合もある。また、1933年当時執筆中の作品が国外で書き継がれた場合、亡命できずに収容所で落命した作家の場合、国外で英語で出版された場合などがある。しかし、通常の亡命文学のドキュメントとしては1933年から1945年までの著作が集められている。本論で「亡命文学」というときは、1933年から1945年までに書かれた、ドイツ語のテキストの意味である。
- 2) A.M.Frey: *Klaus Mann: Der Vulkan*. S.408 及び M.Wegner: *Exil und Literatur*. S.187 参照。
- 3) 例えば、M・ヴェグナーは亡命史を考慮しながらテキストに即して解釈し、G・ベルクルントは現実の政治史によって物語を検証、批評している。L・ヴィンクラーは唯美主義からの離脱としてクラウス・マンの時代「参加」を説明している。
- 4) M.G-Dellin: *Klaus Manns Exilromane*. In: *Die deutsche Exilliteratur*. S.457 及び L. Winckler: *Ästhetizismus und Engagement in den Exilromanen Klaus Manns*. In: *Schreiben im Exil*. S.205 参照。
- 5) Klaus Mann: *Wendepunkt*.
- 6) A.M.Frey: *ibid.* S.407
- 7) Th・マンはマリオンを中心としたテーマの構造を読み取っている。(1939年7月22日付けのクラウス・マン宛の書簡)

亡命文学の展開

確認のために一応敷衍すると、1933年2月27日夜の国会議事堂放火事件以後、作家・知識人たちの大量出国が始まる。即日(28日)公布・発行された共産主義者弾圧のための大統領緊急令、3月21日の、反対派の弾圧が無制限に可能になる大統領緊急令などによって、大量逮捕が現実のものになり、コミュニストや社会主義者ばかりでなく、すべてのナチスに批判的な作家・知識人たちの身にも危険が迫ってきたのである¹⁾。クラウス・マンは、3月13日の出国であった。

作家・知識人の亡命の波は1933年秋頃までに終わったが²⁾、彼らは亡命先の各地で従来の雑誌を亡命雑誌として継続発行したり(『新日記』*Das neue Tagebuch*, 『新世界舞台』*Die neue Weltbühne*, 『労働者イラスト新聞』*AIZ*)、新たに創刊して反ナチス運動の重要な表現手段とした(『文集』*Die Sammlung*, 『新ドイツ雑誌』*Neue Deutsche Blätter*)。これらの雑誌に拠ったグループは文学的視点よりも政治的視点に応じて結成された³⁾。従って、武器としての文学

を掲げて文学の政治化を要求するコミュニスト派から、政治と文学を区別し、作品は間接的に政治的性格をもつことに留めようとするリベラル派まで、闘いの形態は多様であったが、亡命文学の共通の精神的基盤は反ファシズムの闘いであり、亡命雑誌は作家たちの孤立を防ぐ連帯の手段であった。クラウス・マンは、政党人に比較して作家たちの団結の強さを指摘し、ドイツの作家たちの二重の機能として、第三帝国の真の性格を世界に向かって、とりわけ近隣諸国に向かって啓蒙し、警告しながら、同時に国内の抵抗派を鼓舞すること（政治的機能）、および「もう一つの、良きドイツ」の言語文化の伝統を海外で発展させること（文化的機能）をあげている⁴⁾。これは亡命文学者の公約数的態度であった。

反ファシズム亡命文学の具体的作品は、強制収容所とユダヤ人迫害などをテーマとして啓蒙的意味をもつドキュメンタリー風なもの、小説ではドイツの現代の運命をテーマとするもの、非合法ないしは抵抗運動をテーマとするものなどがある。これらは国外に対すると同様、ドイツ国内の潜在的な反体制派やナチスイデオロギーを見誤っている人たちにも向けられた。しかし、1935年1月のザール地方の帰属を決定する住民投票で圧倒的多数（90.8%）によりドイツ編入が決定した後、亡命作家たちは反ファシズム運動による早期帰国の現実性への希望と、ドイツへ直接働きかける中継地を失った。この年の8月には、『文集』と『新ドイツ雑誌』が早くも廃刊に追い込まれた。

一方、1935年からは運動の統一への模索も活発になっている。文化養護のための作家会議開催、ドイツ人民戦線設立への努力、雑誌『言葉』（Das Wort. 1936）、『尺度と価値』（Maß und Wert. 1937）の創刊などである。しかし、1936年からのソ連における粛正の影響などもあり、ドイツ解放のための反ナチス勢力の結集は結局破綻した。それにつれて、亡命作品も歴史小説のような内省的なものに傾いていった。次第にドイツ国内の現実から離れ、そこでの問題性にも疎くなると、特に非マルクス主義的作家たちの間で、過去の歴史の中に自己正当化の原理を見出だそうとする動機が生じてきたのである。また、第三帝国の前史を描きながら、ナチスの権力獲得にいたる道筋の中で自己確認の作業がなされた。同時に、作品の創作においてばかりでなく、歴史小説論争や表現主義論争（リアリズム論争）にみられるように、現実の闘争のための有効性や文学的態度あるいは文学の社会的態度をめぐっての活発な論争も展開された。

このような過去を手がかりとする自己省察や歴史主体の確認作業と並んで、亡命そのものをテーマとする作品もあらわれてきた。ザール州の帰属決定の住民投票後及びスペイン市民戦争の敗北後の自殺の増加は反ファシズム運動の挫折と結びつけて考えられた。このような政治情勢やその他の亡命生活のさまざまな困難から、ドキュメント兼ある種の鎮魂歌として、また精神的態勢の立て直しの模索として作品が書かれた。1938年のオーストラリア併合やチェコ・ズデーテン地方の割譲後、作家たちは第二次亡命を余儀なくされ、逃亡者となってヨーロッパを離れていったが、1935年以後この時点までに、亡命生活は決して一時的なものでなく、ある程度永続的なものとして自覚されたのである。クラウス・マン『火山』（1939）は、L・フォイヒトヴァンガーの『亡命』（1939）やB・ブレヒトの『亡命者の対話』（1940/41）と並んで、亡命の現実の問題性をテーマとした作品の代表的なものに数えられる。

第二次世界大戦開戦以後は1939年に『言葉』と『新世界舞台』が、1940年には『新日記』と『尺度と価値』が廃刊され、亡命誌を拠点とする作家たちの反ファシズム運動はほぼ力を失っ

た。文学作品ではS・ツヴァイクの自伝的回顧、『昨日の世界』(1944)や、Th・マン『ファウスト博士』(1943/47)のように、一つの時代の終わりを予感する総決算的な作品が多く書かれるようになった。

- 1) 『ドイツ文学の社会史』(Sozialgeschichte der deutschen Literatur. 1981)では2月27日に続く数日間の逮捕者として15名、3月末までの出国者として59名の作家の名をあげている。
一方、M・ヴェグナーによると、国内にあっては「ドイツ純血保護法(1933.9)」,「帝国文化委員会法(1933.9)」さらに、担当の諸官庁の設置により、イデオロギー統制が厳格になり、自由な作家活動は不可能になった。(M. Wegner: ibid. S.34)
- 2) 付言すると、ユダヤ人の出国は1938年11月9日の「水晶の夜」以後急増した。
- 3) 『ドイツ文学の社会史』では無政府主義者、無党派社会主義者、コミュニスト、社会民主主義者、市民的リベラリスト、左翼リベラリスト、急進的民主主義者、市民派個人主義者という分類。
- 4) Klaus Mann: Der Wendepunkt. S.335

クラウス・マンの亡命と作品

クラウス・マンは1933年3月13日にドイツを逃れた。彼は後年その理由を二つあげている。「忌まわしい臭気」に堪え難かったこと＝ナチスの粗暴を容認できなかったことと、ドイツでは「無意味な殉教者」となるか「日和見主義の裏切り者」になるかの二者択一しかないという認識、つまり反ファシズムの戦術的な面の理由である¹⁾。恐怖についてはあまり問題にしていない。1933年9月にはアムステルダムで亡命雑誌『集合』を創刊した。創刊の辞ではナチスの暴力に対峙して、「精神への意志」を結集することを宣言している。後年語るように、彼は「政治的な義務」と「文化的な義務」の両面を自らの活動に意識したのである。このような背景から、1934年にはモスクワでの作家会議に参加。同年ドイツの市民権剥脱。1935年にはパリの「文化養護のための国際作家会議」に参加した。

作品に目を転じてみると、1934年に『北方への逃走』、35年に『悲愴交響曲』、36年に『メフィスト』、37年に『格子窓』、39年に『火山』と、5つのロマンを書いている。『北方への逃走』は北へ逃れた市民階級出身の女主人公が、そこで得られそうになった個人の幸福を捨てて、非合法の反ファシズム闘争へ合流するまでの、迷いと決意が語られる。『悲愴交響曲』と『格子窓』は前者がチャイコフスキーを、後者がルードヴィヒ二世を主人公にしたロマンである。クラウス・マンは若いときから、自己省察、自己分析を作品に反映してきた作家であるが、これらの作品では、作者自身の人間的弱点、病的なものへの関心が、異境的な存在意識と重なってあらわれている。『メフィスト』は彼の姉のエリーカ・マンの最初の夫で、ともに演劇活動をした俳優、ヘンドリック・ヘーフゲンをモデルに描いた「第三帝国の中の出世物語」である。そして『火山』は副題の示すとおり亡命者たちの物語である。

ところで、亡命者たちの論争、「表現主義論争」の発端となったのは1937年9月号に掲載されクラウス・マンのゴットフリート・ベン批判であったが、文化史的に見ると、彼の作家的発展には市民社会から離れた芸術的態度に対する批判が根底に流れている。L・ヴィンクラーは唯美主義と市民社会の関係から、クラウス・マンのアンガージュマンを理解したが、そこでは

クラウス・マンの理想が、唯美主義と進歩の一致であると説明されている²⁾。クラウス・マン自身、自分の成長過程の芸術的に病的な側面を認めているが、モラルの問題がハインリヒ・マンの場合と同様に、唯美主義批判の出発点になったという。そして、彼の唯美主義との対決の中で、モラルとその社会的表現としてのデモクラシーが中心の課題となり、その視点から、非合理主義的唯美主義のファシズムとの親近感が明らかにされていったという。当時のクラウス・マンの有名な公式は、「唯美主義者として出発して、社会主義者に行き着く」ということだったのである³⁾。このような観点からは、クラウス・マンの亡命中の作品は唯美主義的文化批判が貫徹されているとして説明される。その最も顕著なケースが『メフィスト』であった⁴⁾。

1) Klaus Mann : Der Wendepunkt. S.332

もちろん、これはすべての国内抵抗が不可能という意味ではない。目立たない秘かなレジスタンスはありえたとし、クラウス・マンも彼らに対する国外からの援助、共闘に国外での抵抗運動の根拠を託していた。ただ、彼のような立場では無理という判断であった。

2) Lutz Winckler : ibid. S.197

3) Klaus Mann : "Gottfried Benn." 1937. In : Prüfungen. S.189

なお、彼はベンに関して、1929年、30年、33年、37年に論文を発表している。

4) この作品に関しては、モデルに対するアンビヴァレントな感情から、小説の構想と主人公の性格が矛盾しているので、政治的主張とモデルの選定が不適切という批評もある。(M. Reich-Ranicki : Klaus Mann und Gustaf Gründgens. S.44)

『火山』

1936年秋にクラウス・マンはエーリカ・マンとともにアメリカに渡り、アメリカ各地で講演しながら、アメリカ社会を見聞した。37年の2月にいったんヨーロッパに戻ってウィーン、ブタペストなど各地を旅行したり、講演したり、夏には『格子窓』を執筆したりして、9月にアメリカに移住した。彼は「もう一度ある一定の国の市民になりたいという願望」を感じていた。ヨーロッパの国々は亡命者に対して思いの外冷淡であった。つまり、彼の感想によれば、フランス人やイギリス人になるためにはその国に生まれなければならないが、アメリカ人にはなることができたのである¹⁾。

1937年の秋、そのヨーロッパとアメリカで苦しんでいる亡命者たちに思いを馳せながら、ニューヨークのホテルの一室で『火山』の執筆を開始した。前年にはスペイン人民戦線が結成され、それは総選挙に勝利し、そしてファシストとの内戦が始まる。スターリンの粛正が始まるのもこの年である。38年は3月にオーストリアが併合され、9月にミュンヘン会談の結果、チェッコのズデーテン地方が割譲された。11月には「水晶の夜」事件が起きた。執筆は39年春まで続くが、ちょうどその頃、39年3月末にマドリードが陥落してスペイン市民戦争は終わった。そして1939年の夏に『火山』が出版されて、数週間後には第二次世界大戦の戦端が開かれた。クラウス・マンは「火山」という比喻でまさにこのような時代の危機を表したのである。

亡命から4年半経過し、根無し草の生活はすべての亡命者に重苦しくのしかかる。彼らの思いも、時代の流れも、なんらかの爆発に向かって収縮していく。人々は帰郷の奇跡にしる、悲

惨な破局にしる、ひたすら待ち続けるしかない。なかには待ちきれずに死に急ぐ者も少なくはない²⁾。クラウス・マンは期待や苦しさのぎっしりと詰まった「乱雑で、豊富で、不透明な亡命体験」を、すべてが飛散する前に書き留めておく必要を感じた³⁾。しかし、彼にとって「迷いと放浪の年代記」の執筆には、書かれるべき対象の苦しみだけでなく、表現者としての自分に対する虚しさが付き纏った。「誰のために、私は書いているのか？」——亡命者たちの苦しさを書き綴ることで、辛うじて自己の生の意味を救いだそうとする、物語の中の亡命詩人の嘆きである。この嘆きは『回転点』の中で作者自身のものとして追認されている。すでに述べたように、1935年のザール帰属決定後、亡命作家たちが直接ドイツに働きかける足掛りは失われた。訴えかける共同体は遙か遠くになってしまった。物語の中の亡命詩人にとって、異国でのよそよそしさ（違和感、疎外感）はもともと身にしむるところだ。故国すらもいまは見知らぬものになりかけている。従って、彼は未来の人間に向かって語りかける道しか残されていない。しかし、未来の人間も見知らぬ人たちに変わりはない。自分たちの苦しみをいったい誰が受けとめてくれるだろうか。虚しさは限りなく広がっていくが、それでも彼は未来の者たちの理解にかすかな望みを託すほかない。これはとりもなおさずクラウス・マンの精神と活動そのものを取り巻く事情であり、虚しさであった。亡命生活を二重に苦しめる虚しさであった。

こういった事情は作品そのものの方向性を規定している。というのは一つには物語の中の亡命詩人が自らに課すように、この物語は一群の亡命者の苦難の足跡を記す年代記であるが、自ら命を縮める者、自己破産の結果麻薬中毒死に至る者、また、熱狂した群衆の暴虐の犠牲となって非業の死を遂げる者たちを描きながら、同時に生き続けようとする者の自己克服の記録なのである⁴⁾。さらに、この未来のために生命を守ろうとする主人公の姿勢を規定しているのは、芸術活動による抵抗運動という形での政治と芸術の一致である。ただし、この抵抗運動は直接ドイツに働きかけることは不可能なので、さしあたり、ドイツに対する啓蒙、ドイツの伝統の中の「もう一つの、良きドイツ」を抵抗運動と結びつけ、国外での反ファシズムの支援を喚起することであった。ここにはドイツの文化的伝統の中からドイツ社会の未来を思考する枠組みが見出だされる。その場合、社会主義に対する理解はあるが、ボルシェヴィズムに対しては留保されている。

1) Klaus Mann : Der Wendepunkt. S.412

2) Klaus Mann : Der Wendepunkte. S.357

3) Klaus Mann : Der Wendepunkte. S.429

4) 前記のように、Th・マンは『火山』の発表当時の手紙の中で、抵抗と未来を結びつける女主人公（マリオン）の、物語り中に占める中心的位置について言及している。

物語はプロローグ、第一部、第二部、第三部、エピローグからなっている。プロローグとエピローグでは書簡によって、1933年の亡命の発端の状況（内面の葛藤）と1939年の大戦前夜の亡命者の状況（内面の姿勢と疑惑）が表されている。はじめの書簡はドイツに残った青年が亡命した友人に宛てた形をとっている。目的は友人に亡命を思い直させることである。そこでは自分の国を離れてドイツのためにいったい何ができるのかを問いかける。ドイツの中で、大恐慌以後の社会の重苦しい閉塞感をはねのける何か新しい力が芽生えていることも事実であり、

事態が悪化すれば国内で抵抗すべきではないかという立場が表明される。この立場にはナチスに対する判断の保留がみられる。これは、書簡の受取人にとっては国内では屈伏するか収容所へ送られるか、事実上二者択一しかありえないので、受取人の立場と鋭い対立をなしている。しかし、国外に逃れる者にとって国内との繋がりには唯一国内の抵抗派を拠点とすることによってのみ保たれ得る。そして、結論的にいえば、国内ではこの抵抗派の存在は不可能であった。

エピローグの書簡はそのことを示している。この書簡は6年後にプロローグのときと同じ差出人が、同じ友人に宛てて、しかし今度はマルセーユから発信した形をとっている。彼もまた亡命せざるを得なくなったのだ。理由としては国内ではもはや窒息するしかないことを挙げている。直接的きっかけは1938年の9月危機（ズデーテン地方をめぐるミュンヘン会談）であった。書簡はここで、ヨーロッパは破滅するか、ナチスを終わらせるかどちらかしかないとの認識を示している。ナチスの問題は、ドイツ国民にとっての問題であるばかりでなく、ヨーロッパ全体の問題なのである。しかし、書簡の差出人にはヨーロッパの共通の問題としてヨーロッパの人々と反ファシズムを闘う意図はない。この時までのヨーロッパにはナチスをヨーロッパの問題として積極的に介入する動きがなかったことの反映であろう。彼の亡命によって、一面確かに亡命の正しさが証明されたが、亡命者の闘争の展望が開けたわけではない。亡命者は自己を堅持して、ひたすら未来を待ち続けるしかないのである。

物語はこの二つの書簡の間で展開される亡命者側の足跡の記録である。第一部が1933年から34年まで。舞台は主としてパリ、その他アムステルダム、チューリヒ。第二部は1936年から37年。チューリヒ、パリ、マジョルカ島といったところが舞台になっている。第三部は1937年から38年。舞台はアメリカ、ニューヨークと中西部の町。全体を通して主要人物は、マルティン（詩人）とキーキョー（ブラジル出身の青年、マルティンの「恋人」）、マルセル（フランス人作家、マリオンの夫）とマリオン（女優）。その他叙述の詳しさからいえば、ティリー（マリオンの妹）、アーベル（ドイツ文学者、マリオンの二度目の夫）、さらに、数人の社会民主主義者、ユダヤ人の銀行家と社会学者（彼らの場合でユダヤ人の問題が扱われている）。各部はそれぞれ五つの章からなるが、その章がさらに細かい部分に分けられて各登場人物のエピソードが綴られる。エピソードは時間の経過とともに次第に緊張の度合を強め、最終的には近い将来の破局、もしくは戦争の予感に向かって展開していく。

第一部では亡命者たちの再会ないしは出会いの場面をかわきりに、国内での受難の報告や出国の事情、先輩亡命者のロシア人家族を通しての亡命生活の苦難の予感、亡命の是非などの問題が伝えられる。ここではさらに亡命社会学者の口を通して、亡命者は決して均質でないこと、例えばユダヤ人の場合と信念に基づく亡命者の場合の違い（ユダヤ人の場合は主として抵抗よりも定着の方が問題である）、政治的立場のさまざまな違い、対立などが言及される。しかし、これらの統合が未来のヒューマニズムであり、ナチス権力に抵抗するのである。総じて、亡命者の苦難と抵抗が問題である。一方において以前の生活の喪失による不安感、逃避と麻薬、パスポートの入手の難しさ、不法滞在の問題、滞在国での冷淡な反応等々。地方において抵抗に関して、統一戦線志向の希望と可能性¹⁾や出版活動の二重の課題²⁾が表明される。

登場人物でいえばこの二つの領域をそれぞれ、マルティンとキーキョーの組み合わせ、マリオンとマルセルの組み合わせが代表する。マルティンは唯美主義的傾向の詩人であるが、亡命の不安の下、同姓愛と麻薬という、いわゆる不道德な生活に耽溺する。しかし、自らはまりこん

だ陶醉と救いのない苦しみの中で、彼は不安な時代の物語を書くことを決意する。「やすらぎのない、故郷のない者たちの冒険と敗北、高揚と崩壊、慰めのない期待」を物語る年代記である³⁾。こういったことの精神的土壌は必ずしも亡命と関係のない部分もあるが、亡命での境遇は以前からの異質な、異境的な存在の総決算であり、それ故、異境の存在における苦悩に鋭敏な神経が働くのである。このような年代記を書くことは闘いとは違った形式の果たすべき務めの形式である。一方、「誰のために書くのか？誰がこの物語に耳を傾けるのか？」という疑問。しかし、書くということ、異境的な存在の奥底で、他者の異境的な存在の苦しみに目を向けること、そのこと自体が彼にとって唯一生への意味を見出ださせる行為であった。同時に、それは描かれる側にとっても救いであり、このような描く側と描かれる側の関係が書くことの虚しさの克服をもたらしているのである⁴⁾。

マリオンの決意は、過去の文化的遺産の中に亡命の正当性を見出し、巡業公演を通じて反ファシズム闘争を訴えることである。しかし、彼女の主張は、「もう一つの、良きドイツ」であって、それは社会の具体的あるべき姿までは迫ってこないが、彼女の精神的な意味でもパートナーであるマルセルは、プロレタリア革命は、人間の解放によって精神を解放する、とプロレタリア革命の理想に期待を寄せる。この理想は問題の性質からいえば、第二部における、ドイツの将来における社会構造と所有関係の変化に関する議論へとつながるものであるが、議論においてはそのような変化が望まれながらも、共産主義とデモクラシーの共存に疑問が支配的であった。この時点ではとりあえず、コミュニストも、デモクラシー支持を表明している⁵⁾。

第二部は亡命者たちの苦悩と絶望の歴史である。亡命はもう完全に一時的なものではなくなっている。確かにドイツ国内での地下活動も報告される。しかし、ヨーロッパの各地でもファシズム支持が目立ってきている。ナチスのスパイ活動も活発になってきた。ヨーロッパは亡命者にとってはよそよそしいばかりでなくあまり安全でなくなっている。このような境遇の変化の中で、マリオンの妹ティリーの悲劇が語られる。不法滞在者ゆえに束の間でしかありえない恋と、妊娠、中絶、そして自殺。相手の恋人はそんなことはまったく知らずにヨーロッパの官憲に追われながら放浪の旅を続ける乾いた世界である。彼女は姉のように闘うことはできない、自分にできることは個々の人間を愛することだけだと訴えて、それができなくなって死を選ぶ。恋人は放浪の果てに慨嘆する：世界の中で余計者だという感情に苛まれると、自分に対する誇りが失われていく…各地で病気持ちの犬のように扱われて、それでも理想主義者でいられるだろうか、と。

マルティンの死は麻薬中毒死である。彼の死で非合理主義的唯美主義の一つの帰結が象徴されている。しかし、物語の中では彼の新たな意志はキリスト教的に感化されたキーキョーによって受け継がれる。これと関連して、ドイツ文学者、アーベルの変化が語られる。彼はユダヤ人ということで亡命せざるを得なくなるが、決して政治的でも革命的でもあるわけではなかった⁶⁾。しかし、彼はオーストリー文学の資料収拾にウィーンを訪れた際、過去に浸った街をまのあたりにして、ウィーンの世紀末デカダンスの下降的雰囲気よりも1948年の精神に今日との親近性を感じたのである。この変化はヨーロッパの現実の中で唯美主義が非現実的になってしまったことを主張する。

マルセルはスペイン市民戦争に参戦し、戦死する。彼は現代において理想は終焉したとの認識の下、彼自身も意識的に狂気に身をゆだね、「言葉から行動へ」向かったのである。スペイ

ン人民戦線の結成と闘いについては、第三部でそれに参加し、敗北したドイツの社会民主主義者によって、「君たちが闘ったということ、団結したという偉大な事実が世紀の歴史を規定するだろう。君たちこそ勝利者だ。」とその意義を賛美する。これこそ望まれながら、まさにドイツに欠けていた点であり、クラウス・マンの政治的な面での基本的立場であった。

マリオンは抵抗運動を国外にいる者の責任と義務を自覚しているが、市民権剥脱や、チューリヒでの公演の妨害行為などによって、彼女も次第に疲労感を感じる。妹を失い、ベルリン時代からの文学仲間を失い、夫を失って、ヨーロッパではあまりにも多くのものを失ったと感じる。彼女にとっては自分も死ぬか、新しく始めるしかないのである。彼女は「我々の全生活は別れた」と慨嘆し、ヨーロッパに別れを告げる⁷⁾。このことは亡命者の立場から見た、ヨーロッパという概念がもつある種の統一性に対する失望の表現であった。

第三部ではマリオンの生きることへの葛藤と亡命者の生きていく理論の構築を中心に、亡命と闘いの意味が問い直される。一人ぼっちになってしまった彼女は、ニューヨークで素朴なイタリア青年と出会う。「若い神」が突然彼女の部屋に入ってきたのである。彼女の生への意志は回復する。しかし、戦闘的故郷喪失者は愛において誠実ではいられない。彼はイタリア解放に参加すべくヨーロッパに戻る決心をする。彼女はここで悲劇的に死んだ妹と同じ状況に陥る。妹のためにも子どもを生まなければならない。しかし、彼女は、流浪の亡命者であり、闘う人間であって、母でないと自覚する。巡業公演の旅先で出会ったアーベルとの対話から、この問題の一つの決着が提示される。彼は主張する：反ファシズムの闘いは生まれてくる子供のためでなければ、誰のための闘いなのか。彼は「勝利について話すのは誰か。生きのびることがすべてなのだ。」というリルケの詩行を引きながら、英雄的な死を否定し、生きることの困難な意味を、亡命の中での生存の意味を語るのである⁸⁾。ドイツから遠く離れているとドイツの事情に疎くなる。そして、亡命者がそれぞれの地でなんとか生活を築いていくとすると、闘う者にとっても誰のために、何のために闘うのか、闘いの意味が分からなくなってくる。しかし、スペインの爆撃の惨状にも見られるように、闘いを止めることはファシズムの蹂躪を許すことである。苦しんでいるものは自分たちだけではない。ドイツ国内にも苛酷な孤独に苦しむ「国内亡命者」たちが存在する。彼らとの連帯も亡命者にとっての責務である。これらは自ら安全なところにいると自覚するマリオンにとって、良心の問題であった。この問題には明快な答は用意されていない。ただ、英雄的な死ではなく、未来のために生の問題がリアルに考えられなければならないとするアーベルの信念が並立されている。またそれによってマリオンは慰められる。物語の語り手は、そして作中の亡命者の年代記の語り手と彼の守護天使も、マリオンの苦境と平行に、亡命の困難な意味について考察する。金銭的、法的不安、さまざまな悲劇のもたらす心の傷。いつも社会の周辺で暮らさざるをえない境遇での自己堅持の難しさ。しかし、一方で亡命の学校は亡命者たちを人間的に鍛える。そして、「追い立てられた者、家なき者、至るところの余所者は、至高の者を正当に評価するためのチャンスに比較的恵まれている。」と認識するのである⁹⁾。これは、やがてやって来なければならない世界の建直しの時のための亡命の意味の積極的評価である。ここから未来のヒューマンズムが語られる。マリオンは自分のディレンマをかならずしも解決したわけではないが、生に向かう。彼女も含めて、故郷喪失者たちに対する物語の最後のメッセージは、「抵抗せよ！敬虔であれ！希望を守れ！自分の足で立て！」であった。

- 1) 若い社会主義者の労働者が強制収容所の様子を報告する：そこでは破滅するか転向するかを選択しかない。しかし、政治的立場の違いを越えて確固とした連帯も芽生えている。「(社会民主主義者もコミュニストも) 強制収容所で本当に知合ったとき、外の世界でも共同作業ができるのがわかる。」
(Der Vulkan. S.143)
- 2) 元ベルリンの労働者学校の先生は亡命出版の課題として、世界に対する啓蒙、第三帝国の危機の警告と、国内の非合法抵抗運動の支援を挙げている。これはクラウス・マンが提起した亡命出版の課題の一つである。(Der Vulkan. S.144)
- 3) Der Vulkan. S.194
- 4) 政治的な観点からの評価の場合、登場人物の思想や描き方の政治的意味が問われるが、クラウス・マン自身は例えば『北方への逃走』の女主人公について、良心にしたがって決断し、反ファシズムの戦列に加わる彼女より、内的分裂し、罪深い官能に揺れ動く女に人間的共感を感じると述べている。『火山』においても、例えば第二部のティリーの場合の描き方のように、その苦しみへの深い理解が示される。このような共感によって、描かれる側も救い出されている。
- 5) 物語の登場人物として、社会民主主義者は名前をもった人物（フムラー、シュッテ）であるが、コミュニストは特定の名前をもっていない。これは両者に対するクラウス・マンの距離を象徴的に示すものとして興味深い。
- 6) アーベルはユダヤ人という設定であるが、もともと非政治的であった。その彼が、正統なドイツの古典的伝統の担い手として、亡命によってその改竄と闘う、とされている (Der Vulkan S.110)。ここにはクラウス・マンのドイツの伝統の理解が象徴的に見られる。
- 7) ついでながら、第二次大戦の第一世代に属するW・ボルヒェルトは自分たちを「別れのない世代」と逆説的に表現している。M・ヴェグナーの亡命文学と戦後世代の不連続の指摘にもかかわらず、ここには一種の精神的連続性が感じられる。
- 8) Der Vulkan. S.514
- 9) Der Vulkan. S.549

結び

『火山』の中心の思想を、M・ヴェグナーは、「生きのびることが勝利なのだ」というアーベルの思想の中に見ている。このことは存在の不確かさの克服である。亡命という、あるいは思想の終焉という状況の中で、存在の不確かさを克服すべく、さまざまな試みがなされる。マルティンはそれに失敗し、マルセルにとってはその試みは死への共感であった。一方未来の思想がマリオンたちを危機から守る。しかし、ヴェグナーは同時にそこに亡命の現実と亡命者の希望との矛盾を見ている。確たる未来の展望のなさである。これは現実の政治に影響を与えることができなかった一つの要因であった。それ故彼は、クラウス・マンのロマンを、意識の変化はみられるが、変革の中間段階以上のものではないと、限界を指摘している。ロマンのドキュメント的価値を認めながらも、「克服」は過渡的ということにおいてのみ意味をもつにすぎないこと、関心が現在だけに限定され、亡命者の希望の中身の歴史的な探求が不足していることを批判している。

M・G・デリンはやはり難民の存在の危機の記録としての価値を認めながら、マリオンの線

で意味付けている。根無し草となった人々の自己克服、反ナチス闘争が生きるための精神的支えになっていること等を中心のテーマと見ている。しかし、伝統と結びつくことによって却って戦後世代と遊離するという、クラウス・マンの精神史上の困難な位置も指摘している。

L・ヴィンクラーは唯美主義の視座から、1933年以後のクラウス・マンの作品に新しい解釈によるデカダンスの克服を見る。唯美主義の歴史哲学的アポリアをモラルとヒューマニズムで置き換え、このような唯美主義的伝統の改編によって文学を抵抗へと結びつけているというのである。このような見方から、物語の中心思想は社会生活の中のヒューマニズムの復権ということであった。しかし、彼もまた、社会的アイデンティティーの具体像はこのロマンには形成されていないと批評している。

G・ベルクルントは作品の政治史的側面を歴史的事実によって検証している。検証結果からは作品の幻想的な側面が浮かび上がる。以下彼の主張の敷衍であるが、政党との関係でみると、組織的な抵抗活動家は社会民主主義者であって、KPDの政策はSPDよりも批判的に見られている。もっとも、このことは大して問題ではない。その批判は意図されたものではない。というのは、作品自体は人民戦線との連帯を描いているからである。これが作者の政治的立場である。しかし、人民戦線の影響には誇張がある。また、国内の抵抗運動の見方は楽観的であり、具体性がない。諸党派あるいは諸党派内部の対立は扱われていない。結果的には政治的党派に属していない人物が最もラディカルに闘っている印象を与えている。以上のことから、内部問題が看過されて、抵抗の闘いが理想化されている。さらにナチス後の社会構想の描き方が不十分。これは問題である。亡命中の運動の分裂は不一致に起因しているからである。作品の中では社会構想の不一致が分裂の原因になっていることの認識がない。

『火山』に対しては、ここでは挙げなかったが、描き方が冗長、通俗的という批判もある。それを別にして、内容に注目すると、一定の社会的、政治的意味、政治と文学という観点における進歩性を認めながらもその限界、特に政治的な領域での限界を指摘する批評が目につく。政治的現実に対するリアリズムの不足に原因がありそうである。一方で、そのドキュメント的価値が評価されている。

リアリズムに関していえば、一般にドイツ国内の抵抗闘争の具体的描写の不足は免れない。これはドイツ国内との連絡が遮断されている状況での共通の現象である。政治的現実については、それが反映されていないわけではないが、この点については別な見方も可能になる。ドイツ国内との連絡がとれないで、ドイツがどう変わったか、国内の人間が何を望んでいるのか、そういったことの事情に疎いとき、その社会を構想するとはどういうことなのか。たぶん、観念性を免れない。クラウス・マンは観念的に論争するよりもまず闘いの次元では共闘態勢の構築（人民戦線）に希望を託したのである。言い換えれば、まず抵抗が問題だった。人民戦線はそのための前提である。それが現実には即していないとしても、それは党派の現実には即していないということで、この希望が多くの亡命者の帰郷の希望に最も添っており、その意味で現実的でないことはない。希望の実現性でなく現実性から見れば、彼の作家としての立場はこの希望に添った闘いを進めることであることを確認する必要がある。社会構想でいえば、問題は個々の構想の優劣ではない。むしろその共存がヒューマニズムと合致すると考えたのである。いずれにしても、政治路線よりも、個々の人間の運命に対する共感が優先した。作者の関心は政治

状況よりも、個々の亡命者により真剣に向けられたのである。そして、亡命者の記録としての価値の評価は、亡命者のリアリズムに即していることを証言しているように思われる。

作品に関して、作品が亡命者の苦難の描写であること、その中心に一つの典型的なタイプであるマリオンが位置しているという見方は共通している。1935年以後の、亡命が一時的でなくなってきた段階で、個人の問題が改めて問題になった。例えばそれはE・トラーの場合にも見られる。彼の場合はさまざまな「恐怖の克服」が問題であった。この面でのマリオン像は困難と矛盾を抱えながらも「それにもかかわらず」(Trotz)の姿勢を堅持して、亡命を未来につなげる役割を示している。

看過されてならないのは亡命の受難の体験を通して形成された視点である。確かに未来の社会に対する具体的展望には欠けるが、庇護なき根なし草の視点とヒューマンズム(至高のもの)との極めて近い関係が認識されている。この地点から社会を考える。ここから、ヒューマンズム＝デモクラシー＝社会主義という組み合わせが一つの枠組みとして浮かび上がってくる。出版、表現の自由、その他さまざまな自由はこの意味でデモクラシーと結びつく。また、これら全体の社会基盤として社会主義(まだ符牒の段階にすぎないが)が考えられている。社会構想は具体的ではないが、根なし草の視点の形成に亡命の積極的意味が見出だされる。

最後に、亡命者に対する呼び掛けの意味に注意されるべきである。物語の中でも、誰が読むのかという疑問が出されているが、孤立しがちな亡命者にとって、互いに呼び掛け合うことはますます必要になっていく。生きることを優先しても、政治的展望のあるなしにかかわらず、亡命者が生きていくことは難しい。自己堅持もさしあたってのものかもしれない。お互いを支えあうために、お互いに呼び掛け合うしかない。

ナチスとの闘いは、国外にあっては自分との闘いの形をとる。闘いによって望まれている帰郷が実現する可能性は少ない。根なし草の状態はいつまで続くか予測もつかない。爆発の予感はあるが、その後はどうなるのか予想もつかない。「帰郷」(それはほとんどヒューマンズムの世界の実現と同義である。)の実現の希望はあまり期待されていない。しかし、それにもかかわらず、クラウド・マンの亡命者たちの物語は、生きのびることを、未来のための庇護なき世界での自己堅持を呼び掛けている。

テキスト

Mann, Klaus: Der Vulkan. Roman unter Emigranten. Verlag Heinrich Ellermann, München 1977 (1939)*

参考文献

Mann, Klaus: Der Wendepunkt. München, 1976. (1942)

Mann, Klaus: Gottfried Benn. Die Geschichte einer Verirrung. In: Prüfungen. 1968, München. (1937)

Mann, Klaus und Thomas: Briefe. In: Klaus Mann: Briefe und Antworten. München, 1975 (1939)

Berg, Jan u.a. : Sozialgeschichte der deutschen Literatur von 1918 bis Gegenwart. Frankfurt a.M. 1981

Berglund, Gisela : Deutsche Opposition gegen Hitler in Presse und Roman des Exils. Stockholm, 1972

Wegner, Mattheas : Exil und Literatur. Deutsche Schriftsteller im Ausland 1933–1945. Frankfurt a.M. 1968

Berglund, Gisela : Der Vulkan. Roman unter Emigranten. In : Deutsche Opposition gegen Hitler in Presse und Roman des Exils.

Frey, Alexander M. : Klaus Mann : Der Vulkan. Roman. In : Maß und Wert. 1940. Nachdruck, Zürich, 1970

Gregor-Dellin, Martin : Klaus Manns Exilromane. In : Die deutsche Exilliteratur 1933–1945, hrsg. v. Manfred Durzak. Stuttgart, 1973

Reich-Ranicki, Marcel : Klaus Mann und Gustaf Gründgens. In : Die Ungeliebten. Sieben Emigranten. Stuttgart, 1968. (1966)

Wegner, Mattheas : Das Exil als Bewährungsfrist. Klaus Mann : Der Vulkan. In : Exil und Literatur.

Winckler, Lutz : Ästhetizismus und Engagement in den Exilromanen Klaus Manns.

In : Schreiben im Exil. Zur Ästhetizismus der deutschen Exilliteratur 1933–1945, hrsg. v. Alexander Stephan u. Hans Wagener. Bonn. 1985

* 括弧内は初版年度を表す